

# 富士道を歩く会

2012～2014年の旅録



都留フィールド・ミュージアム

FIELD  
NOTE

藪をこぎ、進むこの場所は古い街道  
交易や信仰、旅行や毎日の生活のために、  
多くの人やものが往来していた道だ





## 本誌刊行にあたって

2012年春。昔の街道を歩きながら地域の歴史や文化を  
探訪する会が、都留市郷土研究会によって企画されました。  
その名も「富士道を歩く会」。大月市にある甲州街道との  
追分から、目指すは富士吉田市の北口本宮富士浅間神社。  
おおむね国道139号を中心に、2カ月に1回ほどのペー  
スで各地域を歩きました。

本誌では、全16回の「富士道を歩く会」で出会った古道の  
面影や路傍の石造物、神社仏閣、印象深い風景などを写真  
とともに紹介します。

寄り道したり、車に乗ったり、もと来た場所へ戻ったり。  
歩くペースや方法はもとより、参加する顔ぶれや年齢層は  
毎回さまざまでしたが、じっくりと歩みを進めるなかで、  
沿道の地域への眼差しも少しずつ変わってきました。私た  
ちの記録が、先人の辿ってきた長い道のりを見つめなおす  
一つのきっかけとなれば幸いです。



### 「都留フィールド・ミュージアム」とは

私たちは、地域全体を博物館ととらえ、市民とともに地域を観察し、調べ、記録し、  
学び合うさまざまな取り組みをしています。このような実践を通して、領域を超えたあ  
たらしい教育や研究の芽を大切に育て、「人間探究」を目的にかける都留文科大  
学らしい活動を目指しています。なおこの活動は、都留文科大学 地域交流研究セン  
ターのフィールド・ミュージアム部門が担っています。

### 「ブックレット」の刊行

都留フィールド・ミュージアムの機関誌『フィールド・ノート』は、2012年で創刊10  
周年を迎えました。10年間の記録の蓄積や日頃の冊子では伝えきれない活動を新し  
い形で残していきたいとの想いから、「ブックレット」は生まれました。『フィールド・ノ  
ート』に関わる人々と毎号一つのテーマを掘り下げ、読者の皆様と地域の姿をみつめ  
ていきます。



# contents

- |    |                  |    |                  |
|----|------------------|----|------------------|
| 06 | 富士道を歩く会とは        | 30 | 第11回 忘れられない風景    |
| 08 | 第1回 追分の発見から      | 32 | コラム・富士道の四季折々②    |
| 10 | 第2回 庚申塔と出会う      | 34 | 第12回 長い年月に気づくこと  |
| 12 | 第3回 「寄り道」の小形山    | 36 | 第13回 御師と富士講信者の話  |
| 14 | 第4回 富士道の旧道を見下ろす  | 38 | 第14回 街道への追憶      |
| 16 | 第5回 地域の財産「地名」    | 40 | 第15回 道祖神の「火投げ祭り」 |
| 18 | 第6回 山道に眠る石塔      | 42 | 第16回 祈りとともに生きる地域 |
| 20 | コラム・富士道の四季折々①    | 44 | 地域交流センター通信から     |
| 22 | 第7回 さまざまな時代の横断   | 46 | 歩いた地域MAP         |
| 24 | 第8回 記録メモから振り返る   | 48 | 歩く会を振り返る         |
| 26 | 第9回 「水源地」への道     | 52 | 富士道歩きの単語帳        |
| 28 | 第10回 不意なるものとの出会い | 54 | 富士道を歩き終えて        |

# 富士道 MAP



第 13 回 p36-37

第 14 回 p38-39

目的地

北口本宮  
富士浅間神社

第 12 回 p34-35

吉田 下吉田

鎌倉街道

# 私たちが歩いた道とは？

標高3776m。山梨県と静岡県にまたがる日本最高峰の活火山、富士山は、古来霊峰として信仰を集めてきた。江戸時代後期には富士講と呼ばれる団体が各地で組織され、みなこぞって「御山」への登拝を目指したという。私たちが歩いた「富士道」(大月―吉田間)は、富士講の人々が

富士山



もつともよく利用した参詣道の一つで、富士街道や谷村路やむらじなどとも呼ばれてきた。道筋は時代によって大きく変遷を遂げているが、現代の国道139号と重なる部分が多い。距離にして、約23km。実際に歩くなかで何を見聞きし、そこから何を考えたのか。2年に及ぶ探訪の旅が始まった。

## 追分の発見から

上大月駅から三嶋神社まで

よく見ると「左 ふじみち」、「右 甲州道中」と彫られている。上大月駅から歩いて5分のところにあるこの道標は、当時の富士講行者を富士山へと誘う大切な役割を果たした。

記念すべき初回、気候に恵まれ「歩く会」日和となった。都留文科大前駅にそぞろに待ち合わせ、13時台発の富士急行線で各回の出発地点へ向かう。これが、学生の参加者にとって歩く会の集合方法の常であった。初回は上大月駅が出発地。移動のあいだ車窓から眺めたのどかで懐古的な町並みに、これから歩く道の歴史的な奥深さを期待する。電車で30分という移動時間は、先人たちの徒歩暮らしに畏敬の念を抱かせる。

駅に着いて、先生方を先頭に歩み始める。要所で立ち止まり、事前に配布された資料に目を落としながら先生方のお話を聴くが、資料の古い地図の読み取りがどうもおぼつかず、大勢でいるのに道中は終始迷子の気分だった。

そんななか、「この道は昔小さな





(上) 内藤さんのお話を聴く一行／(右下) 大月東中学校の付近でかつての追分の位置を探る／(左下) 139号を進む



橋だった」とか「目の前の住宅地は、古くは田畑であった」といった先生方の細やかな記憶は、富士道を思い描くのに大変心強い。苔むした道標も、二本の大道の古くからの存在に実感をもたらしてくれた。

この道標であるが、昭和20年以降国道の建設に伴い移動したという。上部に力強く刻印されている正の字は、何を意味しているのか。先生方にお伺いしたところ、明確には分からないが、建立した講社の名称の可能性があるとのことだった。富士山の図柄も刻まれており、百年以上前の人々の富士山信仰の深さが垣間見られるようだ。

当時の人々にとって、この石碑は一瞥するだけの何気ない存在であったのかもしれない。それを今、目の前にすると、まじまじと見入ったり触ったりしたくなる。雨の日も風の日も人々の道標となっていたという事実を、苔むして年月を感じさせる外観が物語っているようで、感慨深いからだ。





(上) 石造物があればそろって立ち止まる／(右下) 山へ遷座した熊野権現／(左下) 3つの川が合流する落水水路橋



甘酒橋の脇、道祖神と馬頭観音にはさまれて特徴的な彫刻のある石塔があった。庚申塔こうしんとうというらしい。石造物に詳しい安富一夫やすとみかずおさんが教えてくれた。

人のお腹のなかの虫、三戸さんしが、庚申の夜、天に登って神様に悪事を告げ口すると、その人間の寿命が縮まってしまう。これを防ぐために庚申の夜につどい、一晩中起きているのが庚申待だ。その証に建てられた庚申塔には、本尊の青面金剛しょうめんこんごうや三猿などが刻まれている。

お腹のなかの虫といい、猿の彫刻といい、先人の発想はなんて豊かでおもしろいのだろう。この時以来、庚申塔は自分にとって数少ない馴染みのある石碑の一つとなった。

道ばたの石碑一つひとつに物語があることを教えてもらうたび、そのものが持っている世界の奥深さに驚いてばかりだ。気になりながらもなんとなく通り過ぎていた「石造物」に、富士道を歩きながらあらためて出会えている。

# 「寄り道」の小形山

—— 田野倉駅から「乳神様」まで ——

私 たちはなぜ、じっさいに現場に出て各地域を訪ね歩くのか。

都留市北部、桂川左岸に位置する小形山<sup>おがたやま</sup>で考えた、  
実地に学ぶ意義や歩く会の性格について。

「見ておきたいものがたくさんあるんですね」。郷土研究会の会長である内藤恭義<sup>ないとうきよよし</sup>さんは冒頭、富士道から外れて小形山方面を歩く理由をこう説明した。木陰を一步出れば、これでもかと汗が噴き出る真夏の午後。かつては舟の渡し場があったという舟場橋の上からは、桂川の水流に親しむ活発な子どもたちの姿がうかがえた。

この日、私がつとも印象的だったのは、富春寺<sup>ふしんじ</sup>というお寺が建てられた方向（向き）について（45頁参照）。主要な街道だったはずの富士道に對し、なぜ背を向けるようにして本堂が建てられているのか。その理由は、富士道よりもさらに古い時代の街道にあった。道の変遷の仕方や、堂宇からやや離れた場所にある「萬靈<sup>ばんれい</sup>等<sup>とう</sup>」という石碑に触れながら、謎解きを





するように話してください。内藤さん。その世界にぐいと引き込まれた。点在する事象に着目し、山手のほうに古道が走っていたという知識をつなぎに、それらを突き合わせて過去の姿を明らかにする。机上で本の内容をそのまま引き受けるのは異なる積極的な歴史との関わり方を示してもらったような気がした。経験の浅い私たちがすぐにそれを実践できるとは限らないけれど、現地へ足を運んで実物に接し、考え、郷土史に明るい方々にヒントをもらいながら、自らも歴史を探訪する一人の当事者になれることを知った。

熟練した先達たちの案内によって、舟場橋から富春寺、明治時代の校舎を保存する尾県郷土資料館、ケヤキの大樹があったという稲村神社、民話や言い伝えが残る「弁慶石」や「乳神様」などさまざまな場所をまわった第3回。この日の大胆な「寄り道」は、行く先々での収穫や各回の内容を重視し、場合によっては予定していた道順すら変えてしまう歩会性格を色濃く反映していた。

# 富士道の旧道を見下ろす

—— 禾生駅から東陽院まで ——

**通**称、「富士みち」と呼ばれる国道139号と平行して走る道。見下ろす先にも道がある。これこそ、昔の富士道だという。よく見ると、下の道には小さな石の祠が並んでいる。この祠の存在が、当時の「道」を教えてくれている。



禾生駅かぜいを降り立ち、スタートしたこの回。はじめに、資料として手元に用意していただいた「井倉村」と「古川渡村」の古地図に目を落とす。よく見ると、菅野川すげの（地図では小野川と表記）を隔てて、それぞれの村が隣りあっていたことが分かった。菅野川沿いを歩いていると、「井倉土地区画整理事業」と書かれた立派な記念碑を見つけた。この碑と出くわすことで、かつて広がっていたであろう景色とは違った町並みになっているのだと感じた。

## 国道139号と旧富士道

旧富士道は現在の国道139号と完全には一致しない。

「あそこに祠があるでしょ」と指差す先に、祠らしきものが4つ、整列してある。この祠を表向きにして、

井倉・古川渡周辺 MAP



古くに使われた道が走っていたというのだ。そして、この旧道こそ富士道だという。車の走っている跡があるから、いまなお住民の生きた道ではあるようだ。しかし、こうした視点を投げかけられないと、どうしても目に入ってこない道でもある。

この旧道沿いを辿って菅野川を上って行くと、道沿いに子持ち地藏があり、少し大回りすると生出神社がある。さらに菅野川に沿うように歩いて古い橋を渡ると、住宅地のなかに細い裏道のようなものが見えてくる。この通りで、「富士道アメヤ坂」と記された道標と対面した。これまで見てきた石碑と比べ字がくっきり読めるため、先人の道を辿る身としてはありがたい。まさに現代版の道標である。この道標を頼りに進むと国道139号へと出てきた。また、ここからが富士道である。

今は「裏道」となっているようなところに、かつての面影がある。いつの時代、それが「裏」へと移るのか。道自体の変遷もまた、富士道を歩く重要な視点であることを学んだ。

# 地域の財産「地名」

旧四日市場村あたり

**時** 折、イチョウが舞い降りてくる時季の生出神社。「おいでさん」と呼ばれ、地元の人々に親しまれている。背が高い社殿を見上げると、細かく彫刻された壁面の模様が見えてくる。巨大な造りに見られる緻密な技に、ただただ圧倒される。

前回の禾生駅から、菅野川とほぼ平行して走る国道139号を富士山方面へ進むと、赤坂駅近辺に辿り着く。赤坂駅周辺は四日市場村よっかいちばと呼ばれる地域。「市場」という地名には交易が盛んであったことが反映されているようだ。その証拠に、139号沿いには市神様が大切に祀られている。また、街なかでは街祖神と出逢った。道祖神はすでに何体も拜んできており、少しばかり出逢い方も心得ていたが、「街」の名がつくものは珍しい。それを珍しいという心持ちになってきている自分に驚いた。聞くと、道祖神と大きな違いはないという。「街」には「十字路」や「道」の意味もあり、あえて「街祖神」とした人は、かなりの知識人ではないかとの話である。

街祖神からUターンして、家中川

四日市場・下谷周辺 MAP



沿いの細い道を抜けて行く。じつは、これも富士道の旧道だ。139号沿いに出て、都留市でもっとも大きい神社「生出神社」へお参りした。毎年9月に行なわれる例祭は、都留市で有名な「八朔祭」。これまで歩いてきたなかでも、人が作り上げてきた文化が見え隠れする土地だな、という印象を持った。

この回でさらに印象に残ったことは、地名だ。生出神社は、菅野川を背にして生出山の麓に建っている。今でこそ住所は都留市四日市場だが、この辺りは、「生出山表向」や「生出山南向」などの小字も残っている。生出神社から少し歩いたところにある清泉寺の小字こそ「生出山表向」。地名そのものも方角を知る道標になるのだなど、このとき思い至った。今の時代は大きなものに包まれてしまっているが、昔は小さな単位で地名がつき、その「場」を具体的に示していたのだ。失われたところある地域の財産の一つが地名かもしれない。そんな思いにも駆られた回となった。

# 山道に眠る石塔

赤坂駅から東漸寺まで



**深** 泉院へと続く山道を進む一行。ここは、旧富士道。狭い道には、馬頭観音や庚申塔、廿三夜塔など、数多くの石碑が眠っていた。

冬らしく、日中でも冷えびえしていた12月8日。第6回目は赤坂駅からの出発で、国道139号沿いの山道と民家沿いの道がおもな経路であった。木立が立ち並ぶ細い道を、枯葉を踏みしめながら歩を進める。山道をゆくなかで、古い石碑の数々を目にする。山の斜面にひとかたまりに集められたように立っており、国道を建設する際に、移動させ、ひとまとめにして置かれることになったものであると、先生方が教えてくださった。確かに、よくよく見ると、古くからありそうなもの、まだ歴史の浅そうなものなど、かたまりには統一感がほぼなく、並べ方にも意図が感じられず、無造作に並べられているような印象を受ける。それでも、各々の石塔には何かしらの意味や、人々が込めた祈りが確かにあるとい





(上) 元あった場所から移動しても、込められた祈りを背負って佇む石像／(右下) 金比羅神社／(左下) 深泉院の十王堂



うことに変わりはない。それぞれ、  
 建立当時に意図されたあり方で、ま  
 た元あった場所には存在していない  
 が、そのことが逆に地域の歴史に思  
 いを馳せさせる。海底の沈没船のよ  
 うな、奥深い存在感が強く印象に刻  
 まれた。

都留市駅近くの、のどかな民家沿  
 いに神社がある。小作りな石段は、  
 鮮やかな朱色の鳥居に続いており、  
 その中央には「金比羅神社」の木札  
 がある。木々や枯葉の、茶色と緑の  
 景色のなかで、ひととき目立ってぱ  
 つと目に付き、まだ新しいもののよ  
 うな印象を受けた。先生方によると、  
 ここは明治時代まで罪人の仕置場と  
 なっており、断定はできないが、も  
 しかするとそういった経緯をもとに  
 作られたものではないか、とのこと  
 であった。山道の斜面にある石塔、  
 金比羅神社の鳥居。両者の歴史的背  
 景を知ると、そのものへの心象が大  
 きく変わる。富士道には数知れない  
 神社・お寺・石塔が点在しているが、  
 それらに触れて研究会の先生方の視  
 点に一步でも近づきたい。

column \* 01

## 稽（ひつじ・ひつち）



2012年11月10日、生出神社周辺を歩いた日のこと。夕日のあたる田んぼ沿いを歩きながら安富一夫さんに「ひつじ」を教えてもらった。「ひつじ」とは、収穫後の稲の切り株から生えてくる新しい芽のこと。「干土（ひつち）」がなまって「ひつじ」となったらしい。「ひつじ」が生えている田を「ひつじ田」とも呼ぶらしい。こんなありふれた景色にも、きちんと呼び名がつけられているとは。ふだん見慣れている風景がなんだか親しみを帯びてきた。名付けた先人の田んぼへの細やかな眼差しに、驚かすにはいられない。

## 一の瀬桑（養蚕のなごり）



富士道を歩いていると、よく出会う木が桑の木だ。庭木と違い、道ばたに1本、ぼつんとあって、手入れされずに伸びた枝葉が小さな日陰をつくっている。これは数十年前まで郡内の一大産業だった養蚕の名残だ。なかでも養蚕用に山梨県内で品種改良されたのが「一の瀬」桑で、栄養があり、柔らかくみずみずしい大きな葉は、良い繭をつくる蚕を育てるために欠かせないものだったそうだ。道の端に佇む桑の木は、かつての暮らしの痕跡をひっそりと今に伝えている。

# さまざまな時代の横断

仲町大神宮から長安寺まで

大 月の追分を出発したとき、戦争の記憶に接するとは思ってもみなかった。しかしそれは、地域史をひもとく重要な切り口であることに違いなかった。

この神社の神様は、男性だろうか、それとも女性だろうか。この日の集合場所となった仲町大神宮でそう問いかけられた。一般的な神社建築は、その社に祀られるのが男性か女性かによって屋根に取り付ける「千木」や「堅魚木」といった装飾の形・数が異なるのだという。しかし、仲町大神宮はその原則には一致していないらしい。単純な間違いかもしれないし、建物はそのままに祭神が変わったのかもしれない。一般的に知られている原則に当てはまらないものが、じつは地域のあちらこちらにあることを知った。

仲町周辺では、おもに太平洋戦争中の話をうかがった。かつては桜の名所として知られた大神宮の界限が食糧難のおりにイモ畑に変えられたこと。都留市護国神社の境内には日





(上)「大手」から、かつて谷村城があった方面を眺める／(右下)都留市商家資料館／(左下)顕彰碑の前にて



露戦争の記念として機雷が置かれていたこと。顕彰碑の前では、軍事教練を受けた話や大陸へ渡っていった仲間の話を聞いた。実体験に基づく記憶の数々は、この地域にも影を落とした「戦争」の一端を克明にものがたるとともに、それまでほかと異なる変わらないように見えた神社や石造物の印象を一変させた。

街の裏通りにあたる寺川沿いに進み、城下町時代の名残である「大手」という場所へ。ここから程近い場所にある都留市商家資料館（旧仁科家住宅）では館長の藤森利光ふじもりとしみつさんに迎え入れていただき、大正から昭和にかけて郡内地方を支えていた織物業の展示を見学した。朱塗りの山門が美しい長安寺では、前住職の花園光明はなぞのあきさんに戦国時代から江戸時代にかけての谷村の様子を解説していただいた。

私たちは、一緒に歩いている郷土研究会の方々はもちろん、その時々に出会った街なかの案内人に導かれ、知らず知らずのうちにさまざまな時代を横断していた。

## 記録メモから振り返る

城南公園から普門寺まで



**郡**内のこと都留市のこと、昔の暮らしや今では見られない風景。

ここでは第8回で記録したメモの一部から、谷村町周辺を歩いた日のことを振り返ってみよう。

▼13時36分、城南公園。家中川の「家中」は大名家の家中、つまり、家臣団の意味。武士が住んでいたことがわかる地名。新町と早馬町の境は細い路地。近くで医院をしていた家の屋号にちなみ、十一屋横丁と呼ばれていた。13時52分、金毘羅神社。以前は通りに面して鳥居があったが今ではなくなった。もともとは川棚地区から遷してきた神様で、昔は東正院と称していた。

▼14時14分、天神社。境内入口の石灯籠は、『甲斐国志』編纂の成功を祈願したもので、森嶋其進の門弟たちが師匠のために奉納した。当時の人の願いがはつきり分かる。境内下の公園では、その昔馬市場が開かれていた。馬喰たちが値段交渉する威勢のよい声が聞こえたという。14時36分、西願寺。寺川にかかる石の橋





(上) 西願寺前の石橋。下を流れるのが寺川／(右下) 天神社の石灯籠／(左下) 水車小屋の跡地



が、改修工事される以前の広い川幅を伝えている。

▼14時45分、金山神社。屋根の向拝という部分は流れ向拝という種類。彫刻された動物はゾウなのかバクなのか。安富さんが青年のころは、この神社の鳥居から滝下浄水場（26頁参照）までが見通せた。武井さん「谷村の穀倉地帯でね、良い田んぼだったんだよ」。

▼15時05分、国道139号「金山神社」信号。中川と寺川から引き込んだ灌漑用水が立体交差している。江戸時代からすでにこのような珍しい造りだった。美容室前の水路は、戦後間もなくのころは見事な石垣が積みまわっていて、アヒルを飼ったり友禅流しをしたりしていた。「宅地が増えたねえ」「変わったねえ」。

▼15時20分、普門寺。数え歌では「崖つぶちの普門寺」と歌われる。引き返して先ほどの灌漑用水と家中川との合流地点。昔は小さな水車小屋があった。安富さん「ゆつくり歩いているといろいろあるね」「みんなと歩いていると思ひ出すよ」。

## 「水源地」への道

法泉寺から佐伯橋まで



丸く刈りこまれたツツジの植え込みが、濃いピンクや白の花をつけている。歩くと汗ばむほどの陽気の4月下旬。地元の新田松子さんの案内で田原の法泉寺から都留市滝下浄水場、佐伯橋までを歩いた。これまで歩いてきたなかでも大学付近のこの辺りは学生にとって身近な道だ。



(上) 法泉寺前にある萬靈等（塔）には側面に彫りかけの文字がある／（右下）鶴水園／（左下）浄水場側から踏切を振り返る



法泉寺から国道139号にぶつかり、山梨県民信用組合の裏を抜けて踏切を渡る。渡ってすぐのところ、右に細い道がのびている。ここを行くと、鶴水園を通りすぎ、滝下浄水場へと辿りつく。線路で分断されているためこれまで気がつかなかったが、ここまですべて1本の道であるという。新田さんはこれを「水源地への道」と言って案内してくれた。なるほど、浄水場へ至る道ということか。これを聞いて初めて、いつも大学へ通う道の本来の目的地を知ることができた。浄水場は、今では柵があり中には入れないが、敷地内にはツツジがあり、新田さんが子どものころはそこでよく遊んだという。手前の鶴水園は、浄水場の完成を記念してつくられた市内で最も古い公園らしい。このあたり、かつては子どもたちのほうが馴染みの道だったのかもしれない。道は変わらずにあっても、時代が変わればそこを歩く人も目的地も変わっていく。お話を聞きながら、いつも歩いている道の記憶をもっと知りたくなった。

## 不意なるものとの出会い

— 田原の滝から「おいしかね」まで —



「ちょっと屋根を見てもらえるかな」。歩く会  
は高いものもよく見上げる。見たのは破風。三角  
部分の板の造りのことで、風よけのためにある。  
ここで注目したのは、2階の破風の両端に膨ら  
んだ部分。まるで焼き鳥の串の持ち手のような  
形をしている。この破風の特徴は郡内でよく見  
られるという。



十日市場・夏狩周辺 MAP



都留文科大学の学生用アパートが建ち、私たちにも馴染みある十日市場。見知っているような町だが、先平方と足を踏み入れるとすっかり歴史探求の目になっている。この回では、永寿院や熊太郎稲荷神社、小篠神社など、自然と一体となった神社仏閣を巡っていく。これまで歩いてきたなかでも、水辺や田畑、山などの自然と距離が近い場所にやってきました。季節は田植えの頃合い。植えられたばかりの苗が、低く張られた水から顔を出している。

十日市場駅の近くを歩いていると、滝守弁財天と書かれた鳥居が目に入る。社がなく、鳥居しか見当たらない。その存在の頼りなさや唐突さが印象的だ。この辺りは桂川をはじめ、富士山の湧水も流れる土地柄、水との関わりが深い地帯。弁財天は水への信仰を意味する。水と隣り合わせに暮らしていく知恵も必要な地域だったのだ。その出会いがたの意なることが、心を掴むこともある。土地の人々の心が、形あるモノとの遭遇から見えた気がした。

## 忘れられない風景

長慶寺から宝鏡寺まで



**富**士道歩きの感動は、季節や時間帯によって変化していく風景のなかにも見出される。時代背景や大きな変遷があった来歴を思い出すとき、目の前に見える光景の捉え方が変わってきた。

忘れられない風景がある。雨上りの田園地帯を歩いた第11回の一場面だ。この日は国道139号沿いの衣料品店前に集合し、長慶寺や八面神社、ついで十二天神社などを順に訪ねていった。

道の途中では、集落がどのような場所に発達したのかが話題となった。いまでこそ住宅は日当たりのよい場所を選んで建てるが、昔はそういう場所に田んぼや畑を作っていた。日当たりは収穫量に影響してくるからだ。ゆえに古い家は山を背負った日当たりの悪い場所に多く、また最近では田畑をやめて新しく住宅を建てるようになって、終戦当時の風景とはだいぶ変わってきているのだという。

郷土研究会の方々は、目の前に見ている風景の奥に往時の風景を重ね





雨上がりの東桂をゆく



見ている。私たちが目視している風景とは往々にして時間の奥行きが違うのだ。その差異に気がつくときは時代の変遷を記録する絶好の機会。書きもらすまいとメモを続ける。

空模様を気にしながら柄杓ひしやく流川へと降り、落差30mほどの太郎滝次郎滝を仰ぐ。引き返して郡内地方では数が少ないという双体道祖神を確認。この道祖神の周辺に着くころには雨が本降りとなり、耕雲院というお寺で雨宿りをさせてもらった。

大粒の通り雨はほどなくしてやみ、一路、東桂の宝鏡寺を目指す。遠く三ツ峠にはゆつくりとした霞の流れがあり、雲の切れ間から陽ざしが入り込んで田園地帯を明るく照らしている。吉田方面からの風は植えられたばかりの稲を涼しげに揺らし、水面をなでるように吹きぬけていった。その光景が忘れられない。近い未来にはすっかり変わっているかもしれない地域のいまの姿。急ぎ足で移り変わっていくその時その一瞬に見られる風景を大切にしたいと思った。

column \* 03

## 冬のケヤキとヤドリギ



2013年12月14日、旧外川家住宅をあとにして吉田の街を歩いていると、冬の空によく目立つものがある。葉を落としたケヤキを彩るヤドリギだ。枝を広げたケヤキをデコレーションするように、もじゃもじゃしたヤドリギがいくつもくっついている。よく見てみると、赤い実をつけている。緑の葉と赤い実をぎっしりつけた大きな毬のような姿は、見つけると、なんだか嬉しい。一年を通してそこにあるのに、気がつくのは冬のあいだだけ。その昔、富士道を歩いた人々がヤドリギを見ることはあっただろうか。

column \* 04

---

## 春の田んぼ (スズメノテッポウ)



田原の滝から大学方面へ抜ける小径に田んぼがひろがる。4月27日、田んぼは一面、淡い黄緑色に染まっていた。正体はスズメノテッポウ。春先の田んぼや畑によく生え、かたく凍っていた田畑を、いっせいに明るい色に塗り替える。田んぼの端に沿って土の色が見えているのは、トラクターで耕した跡だろうか。4月下旬、そろそろ田んぼの準備が始まる。

香西 恵=文・写真

長い年月に気づくこと  
 北口本宮富士浅間神社

富士道を歩く会が最終目的地としていた北口本宮富士浅間神社。しかし今回、参加される先生がたのご都合を考慮して、順路を守ることも内容の充実を優先させて先にゴール地点へ足を運んだ。

11月16日、富士道を歩く会は北口本宮富士浅間神社へ。数ある浅間神社のなかで最大の面積をほこる境内はおよそ8万㎡。もともと諏訪明神を祀っていたため諏訪の森と呼ばれているそうだ。ひんやりとした森のなかを伸びる参道の左右には130基ほどの石灯籠が並び、一部の石灯籠には卍の印が刻まれている。神社のはずなのに、何故寺院を表すものがあるのかを内藤さんが解説してくださった。これは神仏習合の名残だという。もともと北口本宮には現在あるものとは別に仏教的建物もあったそう。何も知らずにここを訪れていたなら、参道正面の社殿を目指し、石灯籠には目もくれずに通り過ぎてしまっただろう。

木造の鳥居としては国内最大だという大鳥居は、このとき60年に一度





の改修工事のために覆いが被せられていた。覆い越しに影が見えるのみだったけれど、首を反らさねば視界に納められないほどの大きさに圧倒される。昔のものは昔のものというのではなく、これからも残すためには手を加えなければいけない。大鳥居を直接見ることは叶わなかったものの、残念だと思う以前に、そんな60年に一度の時に立ち会う貴重な経験をできたのが嬉しくもあった。

このときはちょうど七五三の時期で、拜殿前には着物を着た子供の手を引く家族連れがいて華やいだ雰囲気がある。七色紅葉を眺めていたとき、頭上からムササビの鳴く声が聞こえはっとした。ここには社殿を囲むように富士太郎杉、次郎杉、夫婦檜と御神木が立ち並ぶ。どの木から聞こえてきたのだろうか。洞がありそうな立派な大木は、御神木以外にも境内に何本もある。そんな長い時間を生きるものに囲まれているのだと、ふと感じた瞬間だった。

# 御師と富士講信者の話

旧外川家住宅にて



12月中旬、御師の家・旧外川家住宅を訪れる。

御師とは、自宅に神殿を備え、遠方からやってきた富士講の信者たちを泊め、宿泊や食事の世話をおこなう、富士山信仰の布教活動や祈祷を生業としていた人々のこと。

富士吉田市街の富士山を正面に見る大通りは、通りに面して石の門柱がそこかしこに残っており、かつて御師の家が立ち並んでいたことを語っている。今では現存しているものは少ないが、そのうちのひとつが旧外川家住宅だ。

## 家の中へ

門を入ると敷地内には細い水路が横切っており、富士講の一行は家へ上がる前にまずこの水で手足を清めたという。屋敷の最奥部にはコノハ





(上) スタッフのかたが解説をしてくださる／(右下) 白衣／(左下) 禊ぎがおこなわれた水路



ナサクヤヒメとそのとなりには食  
行身祿さきみろくがまつられている。一行はこ  
こにお参りをして、富士登拝とうぱいに発っ  
て行った。

屋敷のなかには富士講にまつわる  
さまざまな資料が展示してあった  
が、この日一番印象に残ったのが、  
富士講信者たちの富士登拝に対する  
心構えの話だ。信者たちは皆、白い  
装束に身を固めて登拝に挑む。富士  
山に登ることは、当時としては大変  
なことであった。命を落とすかもし  
れない、それほどの旅の覚悟が白い  
装束に表れている。今の自分たちに  
は想像もできない覚悟を持って、富  
士道を歩いてきたのだろう。

そう思うと、これまでの道のりが  
まったく違うものとして見えてく  
る。あちらこちらに寄り道して、気  
ままに歩いてきたけれど、果たして  
富士道に行く信者たちの胸にはどん  
な思いがあったのだろうか。ここへ  
来てあらためて思いを馳せる機会と  
なった。

## 街道への追憶

小室浅間神社から松尾神社まで

**富**士吉田市のおひめ坂通り（県道704号線）と中央自動車道が入り交じる道のそばに建つ道標。側面には、「吉田 ぬまつ をだはら」と彫られている。左道は「あらくら」、もう一面は「かうふ」「善くわうじ」と確認できる。この町は、さまざまな街道が入り交じる。

西桂町を抜けて富士吉田市へと歩を進める予定が、西桂町の案内人の体調を考慮し、急遽富士吉田市を先に歩き回っていた回。電車だけではなく、車での移動も私たちの「歩き方」になりつつあった。

国道139号沿い、下吉田駅のそばにある小室浅間神社が出发点。地元の方々には「下浅間」と呼ばれ親しまれている神社である。一度も見ることがないが、流鏝馬やぶさめが有名で、敷地内には神馬も飼われていた。氏子の方々だろう、寒いなか、紫の法被の集団が境内の掃除をしている。神社というより、公園のような安心感が漂う。ここから南へまっすぐ行くと、第12回でお参りした北口本宮富士浅間神社に辿り着く。となると、富士山の登山口へはあと少し、ここは富士講者にとって心奮い立たせる





休息所となったのだろうか。

富士吉田市で高校時代を過ごした郷土研究会の河野迪治このみちはるさんによると、現在の下吉田は、絹織物で栄えた街だったという。「絹屋街っていい、それは賑やかだった。ものすごい活気だったんですよ」。やはり当時を知る人に聞くと心に響く。駅付近の「西裏」は、当時の歓楽街であり、絹の売買で懐を温かくした人たちがやってきていたそう。しかし、絹屋街も西裏も、当時の面影はない。

この回では、ほかにも、下吉田駅を中心に、神社仏閣をいくつか見て回った。それ以外に、富士道には直接関係がない道標を見た。善くわうじ（長野県）、をだはら（神奈川県）、かうふ（国中方面）と、さまざまな地域が登場する。古くから多くの往来があったのかと想像するのは容易い。ただ、どんな人がどんな思いでこの道標を見たのだろうか。いくつもの道標を見てきたからか、そんな想像もしたくなる。縦横に結ぶ街道の存在を物語るその背景に、多くの人々の足音が聞こえてくるようだ。

## 道祖神の「火投げ祭り」

西桂の街を歩く



西桂の街は国道沿いに車で走ればすぐに通り抜けてしまう。けれど、国道を一本外れれば、神社や民家、狭い路地などがあり、庭先には植木鉢が並べられ、たしかにそこに人々の生活があることがわかる。

旧道から急な階段を登ったところにある諏訪八幡神社の境内からは、西桂の街を見渡せる。小沼浅間神社には大きなうろのあるケヤキがあって、あたりには砂粒に紛れてこうもりのフンがあった。境内のバイカモの咲く水辺では菜っ葉を洗う人に出会った。

その地その地の暮らしの光景に出会うと、知らない土地も奥行きを持って見えてくる。「歩く」ことなんだかぐつと親しみを増して出会うことができる。富士道は毎日がそんな街歩きである。





### 道祖神の火投げ祭り

街を歩いてみると梅の花が満開で春の日差しあたたかなこの日は、西桂を抜ける富士道を歩き、いつものように周辺のお寺や神社を訪れた。先にゴール地点を歩いているので実感は湧かないが、じつは今回が（補講をのぞいて）最終回である。特におもしろかったのは「火投げ祭り」の話だ。

桂川の川岸に「火投げ祭り」の看板がある。川をはさんで倉見村と小沼村の子どもたちが火のついた木を投げ合う「火投げ祭り」という道祖神の祭りが明治時代からあったという。危ないのでいつしかやめてしまい、今では祭りに立ち合った事のある人はいない。これまでの道中でもあちこちで道祖神の碑に出会ってきたけれど、このような変わった祭りがあったとはちっとも知らなかった。知らないまちで出会う彼らは、見つけるとどこか嬉しい存在である。彼らの祭りが今では見られないのが何とも残念だった。

# 祈りとともに生きる地域

補講・富士吉田と西桂の境



約2年間に渡り続けてきた富士道を歩く会。補講として設けられた第16回目は、寿駅から三ツ峠駅間の「上暮地」という土地の界隈を中心に、自動車も活用しながら道を辿った。上暮地の地名について、頂いた資料に「日光早ク暮ル、故ニ暮地名ツケシナルベシ」と素朴な由来が記されており、富士急行線の車窓から眺めるだけであった未知の土地に親しみを感じながら、最後の「歩く会」への意気込みを新たにす。

## 道祖神との出会い

出発して間もないころ、先生方がこの辺りは道祖神が多い、とお話されていたが、じっさいに歩いてみると本当によく見かけた。お稲荷さんと隣り合わせになっているものや、側面に「四月大吉」とのみ刻ま





(上) 刻印された文字を読み取ろうとする河野さん（左）、内藤さん（右）



れた建立年不明のもの、幼稚園に併設された福昌寺というお寺にあってものなど、3時間ほど歩くなかで少なくとも6〜7基は目にした。それに加えて、お地蔵も比較的多く見かけたように思う。当時、一つの集落を5、6軒に小分けにして出来たグループが、各々で建立していたという先生方のお話から、当時の地域住民にとって馴染み深く愛着を感じる存在であったことがうかがわれる。それと同時に、信仰や祈りを重んじ、一つの組織で共有する、といった住民同士の結びつきが強い地域性の表れでもあるのではないかと。

信仰とともに、民家や田畑のあるのどかな風景に溶け込み続けてきた石碑は、個々の佇む姿に大差はないが、目にするたびにその一つひとつの裏にある、建立した人々の存在を思わずにはいられない。また、先生方が刻印をなぞるように道祖神に触れながら、刻まれた文字を確認する眼差しの先には、私たちの知らない当時の風景も写っているようではないか。

「富士道を歩く会」はどのような目的をもって活動していたのか。また、学生の視点から見た、郷土研究会の方々とは――。

「地域交流センター通信22号」(2012年11月)掲載の寄稿文を転載します。

## 地域探訪を楽しむ「富士道歩き」

内藤恭義 (都留市郷土研究会会長)

「富士道を歩く会」は、都留市郷土研究会と都留文科大フェイールド・ミュージアムが共同開催する事業で、地域を調べようとする者にとってきわめて基本的な理解をはかることを目的としております。

都留市郷土研究会は、ミュージアム都留との協力事業として古文書教室、歴史教室、民族教室などを開催し、より深い調査や研究の成果をあげるべく基本学習をしたり、機関誌『郡内研究』で個人の研究成果を発表しております。都留市立図書館とは夏休み中に出される自由研究の相談に応じての協力事業があります。「富士道を歩く会」は、フェイールド・ミュージアムと共同しての大学との協力事業として位置づけて今年(2012年)5月からスタートしました。参加は自由ですが、郷土研究会員とフェイールド・ミュージアムの機関誌『フェイールド・ノート』を編集する学生、教員が主体です。「歩く」ですが、鍛錬のための歩きではもちろんありません。歩くことによって何を得ようとするのか目的はそれぞれです。道筋の変化を知りたい、道筋の公共施設を調べたい、石碑などから進行を、地形と集落の形成を、地域の動植物は……。各人各様でノートへの記録もさまざまです。

たずねる道は、江戸時代の村単位で、1回に

つき1村です。準備されるものは、江戸時代の村地図、当日の該当地の地図、甲斐国志記載の村、神社・寺・古跡などの説明書きや『都留市地名事典』での村名や小字名の説明書きなどです。

これらの資料をもとに、主として郷土研究会会員で村調査にあたった者や地域の有識者から説明をいただきます。

例えば、今度行なわれる四日市場では、集落がなぜ山陰やまかげに存するのか、「市場」と名がつくことから考えられる歴史、なぜ遠い地域の上谷村や下谷村までが生出神社おいでしんじやを産土神うぶすながみとしているのか、あるいは住宅分布状態から見て現在の大変化を認識し原因を探るなど、さまざまなテーマを含む実地の探索になろうかと思えます。「富士道歩き」が学生の地域探訪の一方法として役立つことを期待しております。



# 富士道の「先達」に学ぶ

牛丸景太（都留文科大学 国文学科2年）

その昔、富士山を信仰する人々が「御山」を目指して歩いた道―現在の大大月市にある甲州街道との追分から、富士吉田市にある富士浅間神社へ至るこの道を、私たちは時間をかけてじっくり歩いていきます。一緒に歩いてくださる都留市郷土研究会の方々は、土地のことを熟知した案内役、いわば富士道の「先達」です。おおむね現在の国道139号に沿って進みますが、ときにはルートをはずれて寄り道をすることもあります。第3回（2012年7月29日）の小形山散策もそうでした。富士道を歩くという観点では進捗していませんが、私はこの回がとても印象に残っています。

富士急行線田野倉駅前を出発してやって来たのは富春寺というお寺。桂川にかかる舟場橋を渡り、やや急な坂を上ったところに本堂があります。ここでは本堂が建てられている「向き」（方角）が話題になりました。富春寺は集落の一番端、桂川を背にした崖の淵に建てられています。つまりこれは、富士道方面に背を向けていることにも等しく、私たち一行はお寺の裏から坂を上ってきたこととなります。

内藤さんは、このお寺の「向き」が、より古い時代の道を推定する手掛かりになるとおっしゃいました。さらに、道は高いところから低い

ところへ変遷していく傾向があるのだとも。要するに、私たちが歩いてきた道は比較的后代のもので、それよりも昔の道はもっと山側のところに通っていた可能性が高く、富春寺の「向き」はこの古道に対応していたのではないかと考えられています。これを裏付けるのが、境内から山側に少し歩いた場所にある「萬霊等（塔）」という石碑です。この種の石碑は私も各所で見たことがありましたが、じつは寺院の入口に建てられることが多いらしく、近くに古道が走っていたことを物語る一つの資料として見ることができるといえます。

お寺の「向き」や路傍の石碑から、古道の存在を考える。まさに点と点をつなぐ作業だと感じました。長年郷土史と向き合ってきた方々と私たち学生とでは知識の量はもちろん、同じものを見るにしても見方や目の付けどころには違いがあるようです。この先、経験豊かな「先達」たちから学べることは、どんなにか多いことでしょうか。史跡に関連する一つひとつの事象を拾うだけに留まらず、それらを統括してどう見ればいいのか。そういった視点も少しずつ学んでいければと思っています。富士講行者の足跡をたどり、地域の歴史や民俗を訪ねる旅は、まだ始まったばかりです。



歩いた地域  
MAP



# 歩く会を振り返る

## ——歩き終えての座談会——

私たちと一緒に歩いてくださった郷土研究会の方々にとって、富士道歩きはどのようなものだったのか。先頭に立って案内してくださった内藤恭義さん（83）、武井一郎さん（88）、河野迪治さん（81）にお集まりいただき、歩き終えての反省や率直な感想をうかがいました。こぼれ話とともに地域を探访する別の切り口も見えてきた、座談会でのひとこまをご紹介します。



武井一郎さん



内藤恭義さん



河野迪治さん

**内藤さん（以下、内藤）** あれを落としたな、というのが出てきてね。一番気になったのは、「馬捨て場」があるんだよね。

**河野さん（以下、河野）** 昔のお墓だよ。

**内藤** 一つもやらなかったでしょ。

**河野** アピオ（田野倉にあるセレモニー施設）の通りをずっと行くと、最後、橋の袂にテニス場があるんだけど、そこが昔、馬捨て場だった。それが今、全部ならしちゃって、公園のようになってる。

**内藤** まあ、目印がないってのもあるけど、やるべきだったなと。各村のことだからね。

**河野** 明治の頃からずっと続いていくから、家畜のお墓だからそれ専門に決めてね。

かつては農耕のために飼われていた馬や牛たち。彼らが寿命や病気や怪我などで命を落としたとき、その亡骸を埋葬する場所が各村々にあったといえます。

**編集部** 大学の近くだと、陸上競技場に馬頭観音が多く建っているところがありますけど……。

**河野** 国道なんかも広げるときに置けないから、まとめて一箇所に。馬頭観音とかみんな自分の家や近くに置くでしょ。そうすると、道を広げるときに邪魔になるから一箇所にやってね。

亡骸はある程度同じ場所にまとめて埋葬し、供養のための石碑は各自都合のよい場所に建てる。それが国道などの拡幅工事によって移動され、まとめられる。第9回で田原周辺を歩いたさい、案内人の新田松子さんは、陸上競技場の近くにある石造物群はもともと田原神社の脇にあって、道を広げるさいに移したものと語っていました。時折道端で見かける小さな石碑が集められていく背景には、現代の道の変遷が大きく関わっていたようです。

**武井さん（以下、武井）** 馬を飼っている人、飼っていない人はどれど

みんなに見てもらいたいものが、たくさんあるんだけど、  
時間が足りないよね——。

らの率があったの？

**河野** 3分の1かな、飼ってるうちが。

**武井** 飼ってないうちはそれは借りるわけ？

**河野** 結や手間替えでね。手間替えできない人は、お金出さないといけないけどね。馬をうんと飼っても、餌の問題があるでしょ。餌がないと飼えない。今みたいに輸入でどんどん入ってくる時代じゃない。量的に飼えない。小さい農家は飼えないから、手間替えとか金銭でお願いする。

手間替えとは、作業などに出役して労働を貸し借りすることです。おもに田植えや稲刈り、屋根の吹き替えや木の伐り出しなど、人手が要る作業で手間替えがおこなわれました。小さな農家はそうしてやっと馬を手配することができたのです。昔はこの家庭でも馬を飼育していたのかと思いきや、じつはそうでなかったようです。

**武井** 昔から農業やるには山が必要

なんだよね。山がないと農業が成り立たなかったんだよね。なかには禾生村の古川渡なんかは、山がないからよその山を借りるわけ。それを入会権というんだよね。

**河野** 古川渡の場合は、九鬼山に入会権を持つてる。そこから柴刈りしたり、あるいは材木売ったり。分収林っていつてね。

**内藤** けっこう山に生活を依存することになったでしょう。焼き畑をやったり、炭焼きを職業にして。東桂の鹿留とか、盛里とか、文大（都留文科大学）の附属小のあたり、炭焼きが多かった。

山林は日々の生活に直結する大きな存在でした。薪や材木のみならず、田畑に入れる肥料も山から調達したのです。ここでは具体的に焼き畑や炭焼きという話も出てきました。話はそこから戦前時中の経験談へと変わってゆきます。

**武井** 4貫目、僕ら学生の頃は、道志で焼いた炭を道志から都留へ運搬

しないといけなかった。馬でも引いたし、けどあの頃は交通がなくて、学生が勤労奉仕したんだ。（道志村の）川原畑つとところに昔小学校があった、そこにみんな焼いた炭が集結しているわけ。それを学生を使って、一日一人ノルマ3俵なんだよ。

**編集部** 1往復で3俵も!?

**武井** 3俵なんて背負えないよ。あれ4貫目だから、3俵っていったら、12貫目。山をのぼらないと行けないでしょう。だから、川原畑の小学校へ行って、みんな学生が背負子しょってくわけよ。それに力あるやつは2俵背負うやつがいるんだよ。峠にのぼってトンネルをくぐって、谷村側の入り口へ2俵おきなさいって。3俵目は、背負ったまま菅野に農林省が管轄していた木炭倉庫があつて、そこに持って行きなさいと。それを持って行けば、ノルマ完了。帰ってよろしいと。僕なんか身体弱かったから、1俵背負うとへろへろしてね。大変だったんだよ。

**編集部** 武井さんが何歳のころですか？

富士道を時代考証をきちっとやって、どの時代、どこを歩いていたか詳しく調べたいね——。

**武井** 昔の（旧制）中学の1年、2年、3年ぐらい。だから、今の学生はいいよなあ。

\* \* \*

**編集部** あらためて全体を振り返っていかがでしたか？ 反省などありますか？

**内藤** それが難しいんだよね。

**武井** 富士道を時代考証をきちっとやって、どの時代、どこを歩いていたか詳しく調べたいね。

十日市場あたりまではだいたいわかるけど、そこから夏狩通ったのか鹿留通ったのか、わからないですよ。そういうことを、できたら皆さんに調べてもらいたい。それがなかなかわからないんだよね。

**河野** 今度も、鹿留の方面は行かずに、夏狩から行ったからね。その辺がどうなっているのか。旧道は十日市場の坂をのぼりきったところから、中華料理屋があるでしょ、あれを通りすぎると左にずっと入っていく道ある。すると線路を渡って、蒼

竜峡団地へ行って、鹿留の集会所のところを通ってね、発電所のところに出て、境に出てくる道がある。だから、この道も使われたのかどうか。十日市場から両方選択できるから。

富士道のルートは時代によって変遷していることが知られています。しかし、そのすべてが明らかになっていくわけではなく、場所によってはどこを通過していたのかがわからない場所もあります。そのうちの一つに、桂川の名勝 田原の滝以降の道が挙げられます。

**河野** 十日市場の田原の滝は、あれつきり（左岸に）道がないからね。川を渡らないと行けないからね。滝の上を通らなければ。

**武井** 「十万石（飲食店）」の横を通ってね。

**河野** あの辺の人に話を聞くと、なにかわかるかもしれない。

**内藤** 住んでいる人が言い伝えて聞いているかもしれないね。

**武井** 下浅間には宿場あるから、下



浅間には出てくるからね。

**編集部** 夏狩で雨宿りしたお寺ありましたよね、あそこの坂をのぼっていくと真ん中に道標が建っている。あれは富士道が通っていたということですか？

**武井** という説もあるよね。夏狩の古い人に聞いてね、わかると良いのだけ。

研究書をひもとくと想定されるいくつかのルートが示されています。ただ、それを裏付ける資料はほとんどないのが現状です。そのなかで内藤さんたちは、地元で暮らしている人

本なんかを通して知っていることも、これのことだと自分のなかで思ったりしてね、良かったよ。



たちが家や集落の口伝として古道のルートを伝え聞いているのではないかと期待を寄せていました。文字資料に残されたものが今あるすべての記録とは限らないのです。

**編集部** 富士道を歩くなかで印象深かったところはありますか？

**武井** とくに私が印象的なのは、生出神社から山を通ったじゃないですか。昔、八朔祭のとき神輿をかついで、よくあの道を通ったなど。昔ほら、谷村にある神輿を禾生の生出神社に持って行って、神事をして御霊を移して谷村へ持ってきて、氏子の

(町を巡行したからね。昔は(道幅が)もっと広かったのかなと。

**河野** 昔はよく手入れしてたからね。だんだん道幅が狭くなったんだと思うよ。(今まで)現場を見てないから、楽しい富士道だった。

**内藤** まあなんていうか新しい知識を得たよね。本にはこう書いてあったけど、実際にはこれなんだなど見たりすると面白いよね。みんなに恵まれて関心がある人が集まっているところだから、楽しかったね。

**内藤** 観音巡りつてのがあるんだよね。そのコースを辿ってみるのもいいかなと思ったな。郡内に三十三箇所があるんだよね。やりながら感じたことは、『<sup>かいこくし</sup>甲斐国志』やなんかに出ているものが今どんな風になっているか、現在の状況を調べてみる。信仰がどうやって広まったとか、考え方はいろいろとあるんだけど、『<sup>あまのこ</sup>甲斐国志』の検証をするというのも一つのテーマだなと思ったしね。

(2015年2月11日レオンプリント社にて)

### 先生方のお話を受けて

道の変遷、山が生活の豊かさに直結していたこと、各村にあった馬捨て場のこと、まだまだ見たりない種々のテーマがあること。富士道を歩く会の先生方の振り返りからは様々な観点が出てきました。とりわけ個人的に興味深く伺ったのは炭焼きのお話です。ちょうどこのとき道志村で炭焼きについて調べていたこともあり、都留側からみた炭に関わる思い出を伺うことができたのは思いがけない収穫でした。それと同時に話を聞くなかであらためて感じたのは、やはり先生方はそれぞれに、都留や富士道で辿った地域を地元として関わってこられたのだということです。よそから来た自分たち学生とは、富士道や沿道の地域に対する思い入れも関わりの深さも、まなざしの先に捉えているものも全く違います。そのような先生方の案内で富士道を歩くことができたのは貴重なことでした。郷土研究会のみならず、本当にありがとうございました。

# 富士道歩きの単語帳

## あ

・おいしかね……柄杓流川沿い十日市場から下夏狩の長慶寺へ向かう農道の途中にある巨岩。おいし、おかね姉妹が富士の噴火で飛んできた巨岩の下敷きになって亡くなったという伝説がある。〔10〕

・生出神社（おいでじんじや）……都留市内の四日市場、法能、井倉の三地区にある。四日市場の神社は旧郷社。〔4〕〔5〕

## か

・甲斐国志（かいくし）……山梨県に関する総合的な地誌。江戸時代の書物。郡内の編纂は森嶋基進が主任を務めた。富士道を歩くうえ

で、現在と過去の比較で用いた資料。〔8〕

・禾生地区（かせいちく）……都留市の北部を占め、大月市と接する地区。1875年、田野倉村、小形山村、古川渡村、川茂村、井倉村、四日市場村が合併して成立した。

・家中川（かちゅうがわ）……広義には寺川、家中川、中川、女川の総称。さらには大川、原川を含めた上下谷村に配された田原滝上を取水口として桂川の水を用水とする堰をいう。狭義としては、柳田橋から田町までの寺川、中川、女川を除く本流をいう。〔8〕

・桂川（かつらがわ）……相模川の上流の別名。南都留郡山中湖村の山中湖を水源とし、相模湾へ流れる。

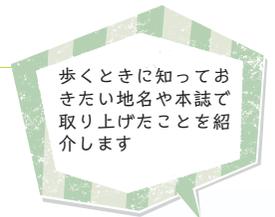
県内流長52.8km。〔3〕〔10〕〔15〕



・北口本宮富士浅間神社（きたぐちほんぐうふじせんげんじんじや）……「富士道を歩く会」が富士道のゴール地点として目指した神社。富士吉田市上吉田にあり、富士登山道の入口にあたる。〔12〕〔14〕

・国中（くになか）……山梨県を二分するときに郡内、国中という呼称をしばしば使う。郡内地方にたいし、甲府市を含む一帯を指す通称。〔14〕

・郡内（ぐんない）……山梨県を二分するときに都留市を含む都留郡一帯を指す通称。国中地方とはお互いに文化の違いを感じる部分があるようだ。〔8〕〔11〕



歩くときに知っておきたい地名や本誌で取り上げたことを紹介します



・国道139号（こくどう139ごう）……富士北麓を迂回し、大月市と静岡県富士市を結ぶ一般国道。富士道はここと重なる。しかし現在の139号線と当時の富士道のルートは完全に一致するわけではない。〔4〕〔6〕〔8〕〔9〕〔11〕〔14〕

## さ

・佐伯橋（さえきばし）……国道139号で田原と十日市場とを結ぶ桂川に架かる橋。新旧2橋ある。滝に近いほうが1927年に竣工した旧橋。〔9〕

・菅野川（すげのがわ）……道志村に近い道坂峠の西南から発し、西流して山峡の谷川といくつとなく合流して細野川と合流し、小野の集落の中央を流れている。さらに西北に向

かつて戸沢川と合流する。〔4〕

## た

・田原の滝（たはらのたき）……谷村地区の最南端、桂川を挟んで十日市場との境界点に位置する。佐伯橋から眺めることができ、古来より富士道の絶景地として著名だったようだ。〔10〕

・太郎滝次郎滝（たろうだきじろうだき）……柄杓流川に落ち込む30メートルに及ぶ滝。上流の滝を太郎滝、下流を次郎滝という。次郎滝には、逃げてきた盗賊が滝壺に飛び込み亡くなるも、見つけることができなかつたという伝説がある。〔11〕

・都留郡（つるぐん）……古代以来、明治初期に至る甲斐国4郡の一つ。現在の北都留郡、南都留郡、上野原市、大月市、都留市、富士吉田市にあたる地域。都留市と混同して捉えがちだが、都留市よりもっと広い地域を指す。

・都留市（つるし）……1954年に谷村町、盛里村、宝村、壬生村、東桂村が合併して成立した。〔8〕

・道祖神（どうそじん）……路傍の神様。富士道を辿るなかで何度となく出会った。厄災の侵入防止や子孫繁栄等を祈願するために、おもに道の辻に祀られている民間信仰の石造物。〔2〕〔5〕〔15〕〔16〕

## は



・八朔祭（はつきくまつり）……都留市を代表するお祭り。郡内三大祭りのひとつに数えられ、毎年9月1日に生出神社の秋の例祭として行なわれる。〔5〕

・馬頭観音（ばとうかんのん）……道祖神とともに富士道を歩く道中たびたび見かけた石碑。馬が移動手段、荷運びとして多く使われたため、路傍に多く見受けられる。動物への供養塔としての意味合いが強い。〔2〕

・東桂地区（ひがしかつらちく）……都留市の南西部を占める。1893年に桂村の東半分が分離しできた村名。それがのちに地区名として継承された。〔11〕

・柄杓流川（ひしゃくながれかわ、ほか呼びかた多数）……西桂町下暮地に源を発し、夏狩の集落の北側を東流し、十日市場と川棚の境で桂川と合流する。年間を通して水量が豊富。〔11〕

・富士山（ふじさん）……日本の最高峰。古来富士信仰が育まれた霊峰であり、崇高な存在としても禁足地であった。時代が下るとともに修行目的を発端として富士登山が広まるようになる。

・舟場橋（ふなばし）……田野倉中野地区から桂川を渡り小形山堀の内を結ぶ橋。〔2〕〔3〕



## や

・谷村地区（やむらちく）……都留市のほぼ中央に位置する。1875年までは上谷村、下谷村に分かれていたが、同年に合併し谷村が村名となる。1954年（昭和29）市制執行後には地区名として継承された。

・養蚕……カイコを飼ってその繭から生糸をとること。外国製品の輸入に押されるまで、郡内地方は養蚕が盛んだった。全盛期は織機をガチャンと動かすと万のお金が儲かるということから「ガチャマン時代」と呼ばれた。

※「」内の数字は表記された回の番号

### 参考文献



『都留市地名事典』  
第22・23号『郡内研究』合併号  
都留市郷土研究会  
2012年3月発行



## 富士道を歩き終えて

年代を超えた者同士が「歩く」ことを通じ、  
地域を見つめなおした今回の旅。

歩き続けると、道祖神ひとつとっても

道や町によって表情が異なることに気づきます。

同じような町並みや道が続いているようでも、

人の暮らしや文化、それを取り巻く自然の姿も異なっているのです。

『行きたいところはたくさんあるんだけど、時間がないんだよね』

内藤さんのこの言葉は、今なら良くわかります。

予定していた道のりを歩き終え、一段落ついた「富士道を歩く会」。

私たちが関心を持ち続ける限り、

また別の場所でも道歩きの一歩目が踏み出せそうです。

# 富士道を歩く会



## 表紙写真

北口本宮富士浅間神社の境内裏手にある吉田口登山道入口の「登山門」。一人ひとりの階段を上るスピードや動きが違っても、目指す先は同じなんだな、としみじみ思ったときの姿を撮りました（撮影：崎田史浩）

発行人  
北垣憲仁

編集・制作  
『FIELD・NOTE』編集部

デザイン  
崎田史浩

執筆・写真  
崎田史浩 [4,5,10,14]  
香西 恵 [2,9,13,15]  
平井のぞ実 [1,6,16]  
牛丸景太 [3,7,8,11]  
別符沙都樹 [12]  
〔 〕内は執筆担当回

イラスト  
金原由佳

案内人（敬称略）  
内藤恭義  
安富一夫  
武井一郎  
河野迪治  
清水正賢  
清水昭伯  
井上 武  
新田松子  
小佐野保子

富士道を歩く会 2012～2014年の旅録  
〈FIELD・NOTE ブックレット1〉

発行日：2015年3月20日

部数：500部

発行：都留文科大学 地域交流研究センター  
フィールド・ミュージアム部門  
『FIELD・NOTE』編集部

〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1  
都留文科大学コミュニケーションホール地下1階

お問い合わせ：  
Mail：field-1@tsuru.ac.jp  
http://www.tsuru.ac.jp/center\_c/index.html

©2015『FIELD・NOTE』編集部 落丁・乱丁はお取り替えます

## ■編集後記

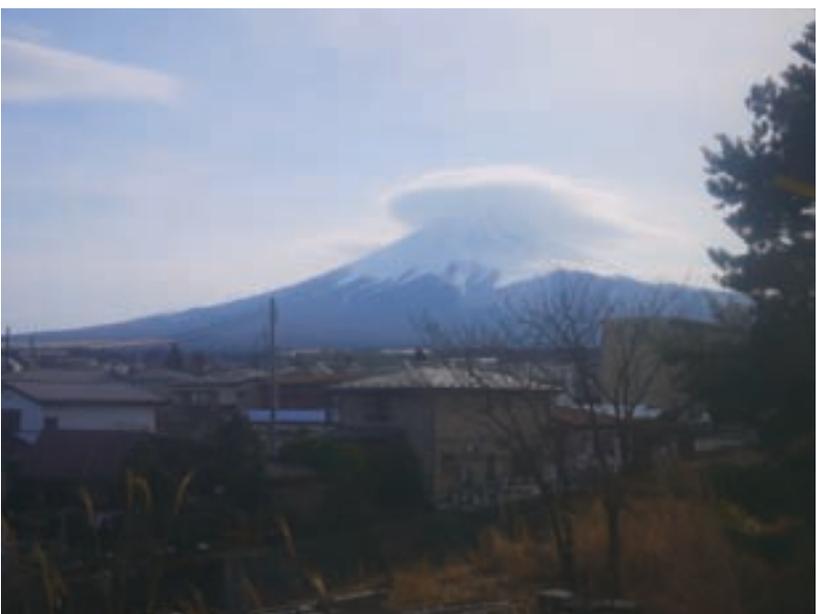
私たちは当初、一年をかけて大月―富士吉田間を踏破する予定でした。それが結果的に二年半かかるにいたった理由は、さきにもご紹介したとおり、一回一回の内容を重視すればこそ。私はかたつむりのような歩く会の雰囲気がとても好きでした。事前に歩くコースを検討し、資料を用意してくださった内藤さんをはじめ、興味深い話をたくさん聞かせてくださった郷土研究会の皆さん、道歩きを応援してくださった地域の方々に、あらためて感謝申し上げます。（牛丸）

「歩く会」の2年間を、こういった目に見える形で残しておくための機会に携わる事ができて、本当に恵まれていると思います。参加した回について、記憶・記録を取り戻すのに多くの方々のサポートを頂いていた事を考えると、恐縮の思いでいっぱいです。ほかの方の文章からは、歴史的・学問的内容だけでなく、独自の視点で捉えた様々な富士道を知ることができ、ずっしり重みのある大切な一冊となりました。（平井）

前半参加しなかったのが歩くたびに悔やまれました。そんな折りに冊子編纂のお話をいただき、OB・OGとのやりとりや編集作業を通して、富士道で歩く会が歩いた道のりをあとからなぞりなおす経験がもて、少し得した気分です。（別符）

2012年、ちょうど大学4年生になった春に、富士道歩く会があると誘われました。あれから3年。このたび、念願の冊子にまとめられました。卒業したあとも、歩く会のお誘いを受けて、東京から山梨へ。毎度、都留へ行くのが楽しみで仕方ありませんでした。すっかり郷愁の念を抱えております。歩き終わっても、郷土への一端をかじっている、次はこんな話を聞いてみたいなど、地域への関心も途絶えません。（崎田）

卒業して2年が経つ今、こうして富士道歩く会の冊子が発行できることに感謝しています。富士道は毎回が新しい出会いの連続でした。じつさに歩きながら、そして先生方に教えられながらその地域の人の暮らしや歴史に出会うことのできたこの活動は、自分にとって当時暮らしていた都留という地域を知っていくための貴重な機会でした。その地域探訪の姿勢をこれからも自分の暮らしす土地で持ち続けていきたいと思います。（香西）



富士道を歩く会 2012～2014年の旅録  
〈FIELD・NOTE フォトリポート1〉

発行日：2015年3月20日  
発行：地域交流研究センター「フィールド・ミュージアム部門」『FIELD・NOTE』編集部  
〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学コミュニケーションホール地下1階